

## 第6章 京都大学吉田キャンパスの試掘調査

宇野隆夫 岡田保良

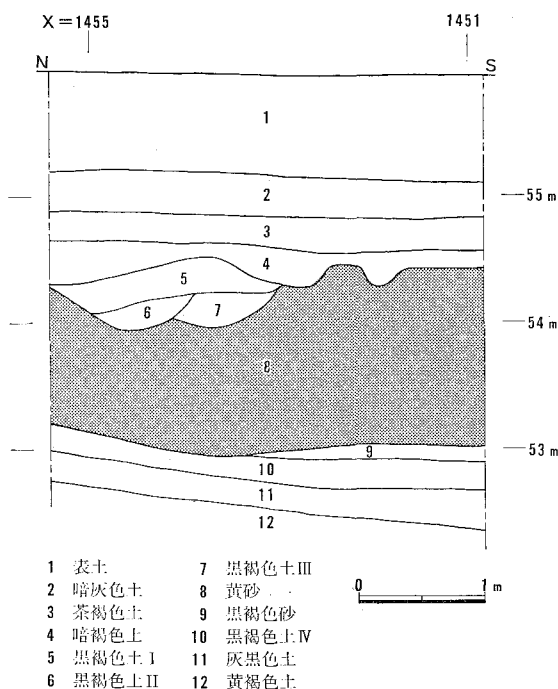
### 1 教養部エレベーター新営予定地の試掘調査(AQ23・AN23区)

教養部 A・D 号館にエレベーターを付設することが予定されたため、予定地に 8 m × 5 m の試掘坑 2ヶ所(TP1・2)を設定した(図版 1-48 a・48 b)。現地表の標高は TP1 が約 56 m, TP2 が約 54 m。北東から南西に向かってゆるやかに傾斜する。

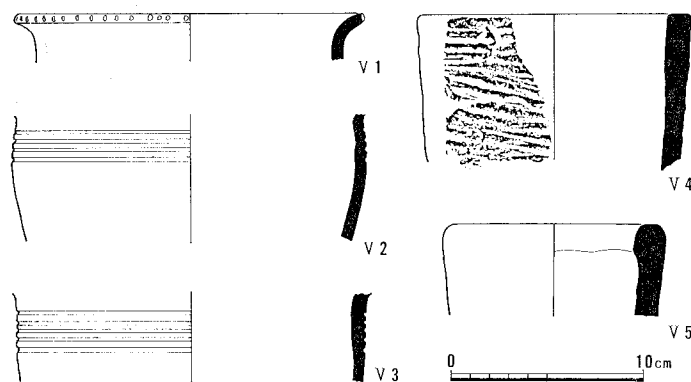
**層位と遺構** TP1 では上から、表土、暗灰色土、茶褐色土、暗褐色土、黄砂、黒褐色砂、黒褐色土Ⅳ、灰黒色土、黄褐色土という土層である(第42図)。黒褐色土Ⅰ～Ⅲは黄砂直上の部分的な堆積である。なお黄褐色土の下には白砂が50cm, 黄褐色シルトが40cm堆積して砂礫に至ることを確認している。暗灰色土から江戸後期、茶褐色土から室町後期、暗褐色土から鎌倉時代、黒褐色土Ⅰ～Ⅲから平安後期、黒褐色土Ⅳから弥生前期の遺物が出土した。遺構は黄砂上面の土坑以外は検出できなかった。

TP2 では上から、表土、黄褐色砂Ⅰ、黄褐色細砂、黄褐色砂Ⅱ、暗褐色砂、黄褐色シルト、白砂である(第45図)。黄褐色砂Ⅰから黄褐色砂ⅡまではTP1の黄砂に対応するが、粘土分を多く含む。検出した遺構は黄褐色砂Ⅰを切る溝 SD1 である(第44図)。断面が整った逆台形で深さ1.2m, 幅1.7m, 底幅0.9mである。方向は東西方向で真北から東へ約 2° 振る。下層に黒褐色土, 上層に暗褐色土が堆積し, 下層から平安末期, 上層から鎌倉前期を中心とする遺物が出土した。

**遺物** V 1～6 は弥生土器で TP1 黒褐色土Ⅳから出土した(第43図, 図版16-1)。V 1～3 は甕。V 1 は口縁端部に刻み, V 2 は口



第42図 TP1 東壁の層位

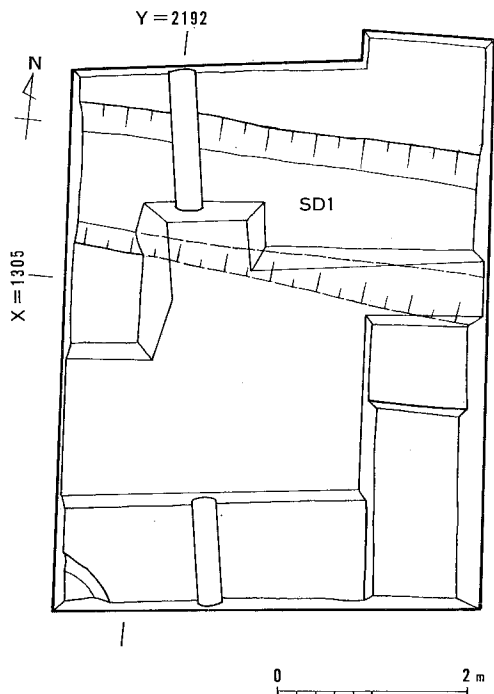


第43図 TP1 黒褐色土Ⅳ(第10層)出土の弥生土器

縁部直下に4条の篋描き沈線文, V3は同じく5条の篋描き沈線文を施す。色調はV1・2が黒褐色で外面に煤が付着し, V3は淡褐色で煤の付着がない。すべて胎土に砂粒を多く含

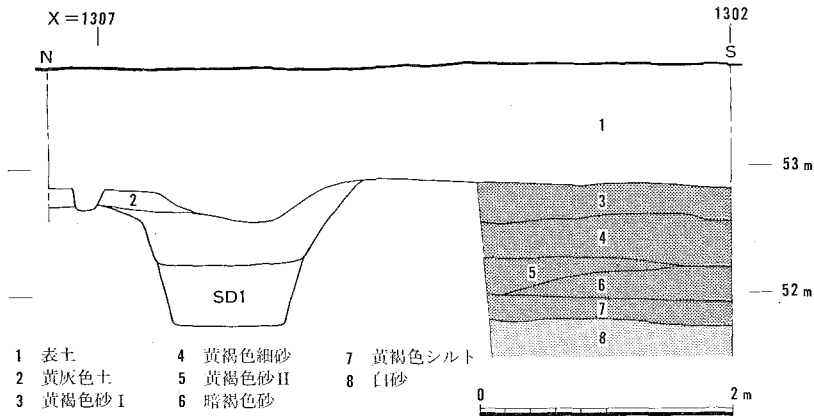
み, 焼成は良い。これらは畿内第Ⅰ様式新段階に相当する。V4・5は口縁部に水平の面取りを施す鉢形の土器である。V4は外面に2枚貝による斜方向の条痕を, 内面には撫でを施す。V5は内外面に撫でを施すが, 内面の撫でが粗雑である。色調はいずれも器壁表面が明褐色で内部が黒褐色を呈する。胎土に砂粒を含み, 焼成は良い。

V7~23はTP2溝SD1から出土した(第46図, 図版16-2)。V7~12・22・23が下層, V13



第44図 TP2 遺構平面

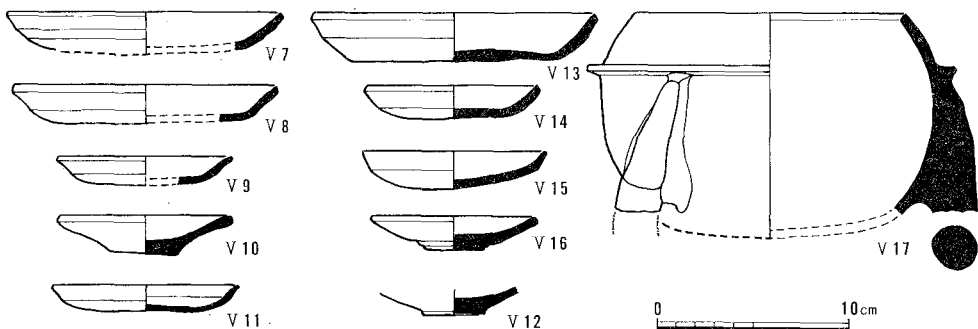
~17およびV18~21が上層からの出土である。V7~9・13~15は土師器皿, V10・16は糸切り底の土師器皿, V11は瓦器皿, V12は白磁皿, V17は瓦器羽釜である。V18は巴文軒丸瓦。瓦当外周に縄叩き目を施し, 瓦当裏面に指圧痕と丸瓦部の剝離痕を残す。V19は雁巴文軒平瓦。V20~23は巴文軒平瓦。V19~23は瓦当と平瓦部が鈍角をなす。V21の平瓦部凸面には直線2本からなる篋記号を認める。V24は, ふいごの羽口。工事中に採集した(図版16-2)。以上のうちSD1下層出土土器は12世紀中~後葉, 上層出土土器は13世紀前葉頃のものであるが, 瓦はすべて12世紀中葉頃の製品である。



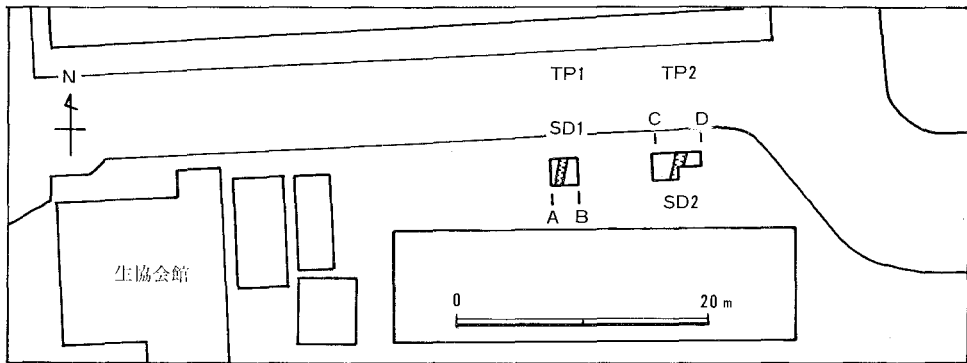
第45図 TP2 東壁の層位

まとめ TP1 黒褐色土Ⅳから畿内第Ⅰ様式新段階の弥生土器と条痕文土器が出土したが、この黒褐色土Ⅳは、弥生前期末に堆積を開始する黄砂層に厚く被覆される。条痕文土器の出土例は愛知県味噌粕岩遺跡〔彦藤67〕、愛知県西志賀遺跡〔杉原・岡本61〕、滋賀県川崎遺跡〔滋賀県教委71〕等があるが、TP1 出土の条痕文土器は水神平Ⅲ式あるいは続水神平式と呼ばれているものに相当する。<sup>(1)</sup>現在の知見では本遺跡がこの土器の分布の西端にあたる。今後このような出土例が増加すれば弥生時代開始期の畿内と東海地方との関係や、その中で京都盆地の占めた位置がより明らかになるであろう。

TP2 の南の吉田近衛町一帯は仁平元(1151)年に鳥羽法皇の後高陽院藤原泰子の御堂御所福勝院が造立されたと推定できる地である〔川上77〕。SD1 より12世紀中葉以後の遺物が出土している点からみて、SD1 は福勝院の北を限る溝である可能性が最も強い。ただしこの地は吉田社の旧社地にも比定されている〔福山77〕。今回の調査では建物との関係が不明であるため、その判断は今後の調査に待つ。(宇野)



第46図 TP2 溝 SD1 出土の土器



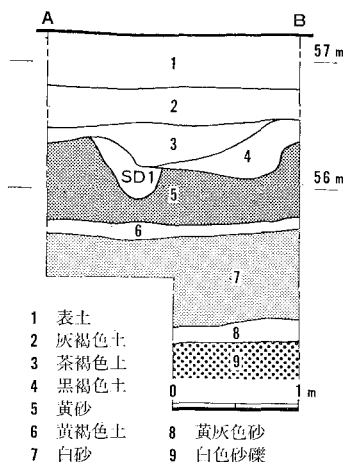
第47図 調査区域

## 2 本部構内排水ポンプ新営予定地の試掘調査(AT27区)

予定地は旧工学部資源工学教室で、面積 150 $\text{m}^2$ である。現地形は標高約 57m で南西に向かって緩やかに傾斜する。現在の建物の北に、2 m $\times$ 2 m の試掘坑を 2 ヶ所設定し、TP1・TP2 とした(第47図, 図版 1-50 a・50 b)。

**層位と遺構** TP1 の層位は上から表土、灰褐色土、茶褐色土、黒褐色土、黄砂、黄褐色砂、白砂、黄灰色砂、白色砂礫である(第48図)。表土と灰褐色土と茶褐色土は江戸時代以後の堆積であり、黒褐色土からは平安時代の遺物が少量出土した。黄砂以下からは遺物が出土しなかったが、黄灰色砂以下は弥生前期以前の堆積であることが判っている。TP2 では TP1 に堆積する土層のうち、表土、灰褐色土、黄砂を検出した(第49図)。

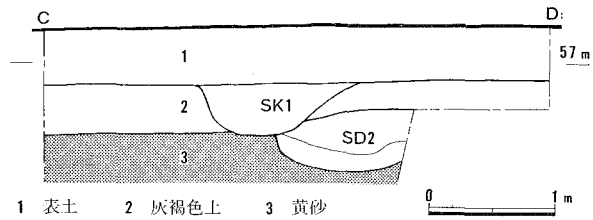
TP1・TP2 で黄砂を掘り込む溝 SD1・SD2 を検出したが、両溝とも方位を真北から東



第48図 TP1 南壁の層位

へ約 7 $^\circ$  振り, 検出高も等しい。また溝の間の黄砂上面はしまっていて, TP2 では小礫を踏みしめた状態になっている部分が残っている。このことからこの溝は, 南北方向で, 幅約 9.8m (芯芯) の道路の側溝である可能性が強い。SD2 には上層に砂混黒褐色土, 下層に黒褐色土が堆積するが, 下層上面から平安前期の遺物が出土している。SD2 を確認するため TP1 を東へ 1 m 拡張したが, 野壺によって壊されていた。これは江戸後期の耕作土である灰褐色土に伴うものである。またこのほか, 灰褐色土を掘り込んで江戸末期~明治期の陶磁器を投棄した土坑 SK1 を検出している。

遺物 SD2 下層上面から須恵器の杯と甕が出土した(第50図V25・26, 図版16-3)。杯は高台がなく、体部は、やや丸味をもつ底部から直線的に立ちあがる。甕は高台を消



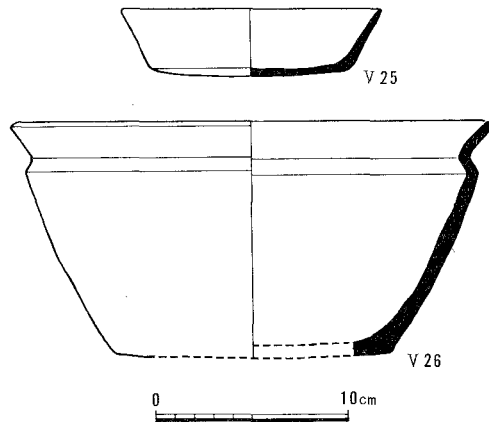
第49図 TP2 北壁の層位

失し、器高が口径に比して低い。いずれも色調は灰青色で胎土に砂粒を含み、焼成はやや悪い。甕は「平城京発掘調査報告Ⅶ」で甕Cとしているものにあたるが〔奈文研76別表6〕、この種のものとしては末期的な特徴をもつ。年代は9世紀後葉頃であろう。またSD1の上に堆積する黒褐色土からは12世紀頃の土師器細片が出土している。

このほか、灰褐色土と野壺および土坑 SK1 から江戸後期～明治期の陶磁器、土師器、瓦が出土した(図版16-3 V27～35)。

まとめ 今回の試掘調査により、平安時代の道路と推定できる遺構を検出した。調査範囲が狭いため、その性格は必ずしも明らかではないが、いくつかの知見を得ることができる。まず方位を東へ振る点は京大北部構内の遺構と共通し、南の京大病院遺跡で検出した平安後期のほぼ真北を指す道路〔京大調査会77図版64〕とは性格が異なる。また付近に現存する白川道とも方位を異にする。本道路を北へ延長すると京都大学本部構内東北部に達するが、ここは杉山信三が吉田寺、吉田葬送地が及んでいると推定した地点である〔杉山54〕。今回検出した道路もこれと関係する可能性が強い。ただし吉田寺については、文献資料とわずかの遺物があるだけで、その実体が判っていない。本試掘地点の北東1.3kmには奈良前期から平安中期にかけて存続した北白川廃寺があり、また若狭へ通じる小浜街道もこの付近を南北に通っていた可能性<sup>(2)</sup>がある。本道路がこれらのうちどれと関係するかの判断は今後の調査に待つ。

また江戸後期の遺物が大量に出土した。これは吉田神社や尾張徳川藩京屋敷と関連する可能性<sup>(3)</sup>があるが、江戸後期に遺物の出土が増加するのは吉田キャンパス一帯で生じる現象である。(宇野)

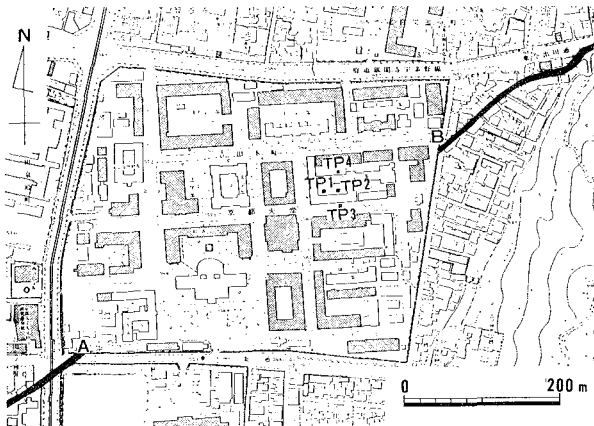


第50図 溝 SD2 出土の須恵器

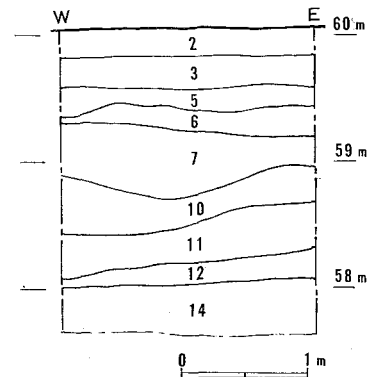
### 3 工学部電気工学科等校舎新営予定地の試掘調査(AW28区)

新営予定地内に4ヶ所の試掘坑 TP1~4(各々2m×2m, 図版1-50a~50d)を設けて、土層の堆積状況および遺構の有無を調査した(第51図)。TP1・2は既設建物に平行して東西同一線上にならび、TP3・4は各西壁とTP2の東壁が南北方向の同一線上にのる。いずれの試掘坑においても、土層の遺存状態は良好である。各試掘坑の層序にはかなりの差があり、層位の対応関係をみると、著しい標高差を有する点が顕著で、かつては起伏に富んだ地形を呈していたことがわかる。第2・第3層は江戸後期以降の耕作土で、明治20年旧第三高等学校用地となるまで畑作がおこなわれていたことを物語る。TP3ではこれらの層位の標高が他の試掘坑にくらべて1m前後も低い。第4層はTP3のみにある無遺物層である。第5層からはTP3を中心に若干の遺物を出土しており、中世末から近世初頭の堆積と考えている。第6層は大ぶりの礫の混じる氾濫層、第7層はTP4にのみ観察できる粗砂である。第8層は真っ黒な土層で、TP1では第8層から第12層まで漸移的に変化する。第13層以下は粗砂乃至細砂である。第6層以下から遺物は出土しなかった。

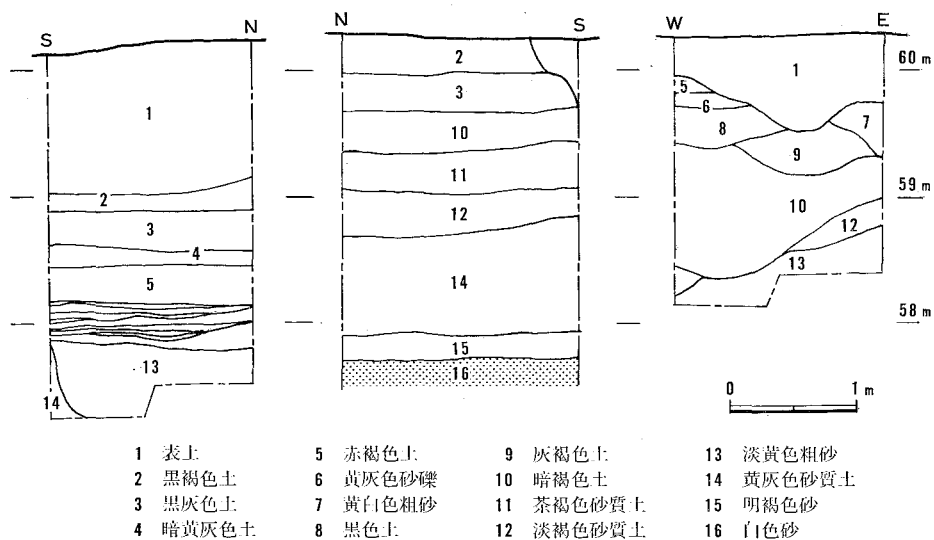
TP3において、第5層を除去して、礫を含んで固く叩きしめられた砂質土を検出した。以下厚さ0.3mほどの間は、砂礫や粘質土がそれぞれ薄くもよくしまつて互層をなす(図版16-4)。これを、長年にわたって人々に踏みしめられた路面の推移を示す層位と考えている。堆積の状態は北に高いゆるい傾斜をもつ地形を予想させる。その堆積の中から採集できた遺物はすべて細片であるが、平安時代に遡る確実な資料は見あたらない。このTP3の位置は、図上地点Aと地点Bとを結ぶ線上にあたる。地点A・Bは通称「山中越え」「白川道」



第51図 試掘坑位置図



第52図 TP1北壁の層位



第53図 TP3(左)・TP2(中)・TP4(右)の層位

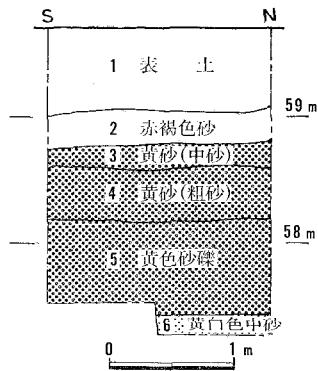
「志賀越道」などとよばれる古くからの往還路の切断点で、今回発見の路面跡がその通路にあたることはまちがいない。この道路の歴史は、『京都の歴史1』によれば、平安京以前にまで遡るとされるが、その点は確証を得ていない。また AB 間の切り取りは、幕末に尾張徳川藩京屋敷設置によるものであるが、その時期まで往還路として供されていた点については疑問がのこる。いずれにしろ今後の調査によってより正確な知見を得るであろう。

TP4 では耕作土層がみられない上に、土層の堆積は不安定な状況を呈しており、最近まで河川が暴れていたことを物語る。明治20年測図の『京阪地方仮製地形図』には、三高キャンパスの中を、地点Aから地点Bに向かう小川を記しており、TP4 にみる流路がそれにあたるのであろう。各試掘坑の層位の相対関係をみると、第2、第3、第10～12層はTP2において最も高い。結局TP2の位置が自然堤防上にあって、その北側を流路が、南側を往還道が走っていたことになる。

この試掘調査の結果、旧街道とそれに並走する川筋の変遷過程について若干の新知見を得た。そのため、本年度以降事前発掘調査をおこなう予定である。

#### 4 環境保全センター重金属処理装置室新営予定地の試掘調査(A Y25区)

新営予定地の東南隅と西北隅に各1ヶ所、2m×2mの試掘坑(TP1・2)を設けて試掘をおこなった(図版1-52a・52b)。TP1では、地表下約0.6mまでコンクリート塊やレンガが詰まり、以下泥質を含む砂礫(第2層)を介して黄砂となる(第54図)。第3～5層と次



第54図 TP1 西壁の層位

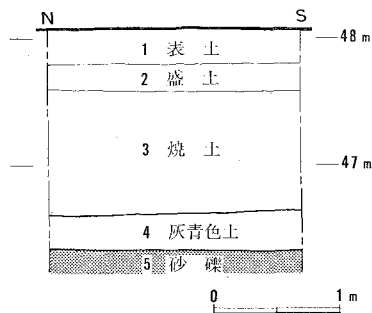
第に粒子の粗い黄砂となるが、地表下約2.2mあたりで再び粒子が細かくかつ白っぽい砂(第6層)となり、この上面にはひとかかえ以上もある花崗岩塊がのる。黄砂とともに白川上流から運ばれてきたものと考えている。TP2では地表下約0.2mで全面に、花崗岩緑石を伴うレンガ敷を検出して掘下げ不能となったため、幅1mで西方に2m拡張したが、既設建物の掘方にあたり、何ら検出することはできなかった。

以上のように、この地区では比較的上位層から無遺物の砂層がみられ、遺構も遺物も発見できなかった。(岡田)

### 5 医学部附属病院西構内電気管理設予定地の試掘調査(AI14区ほか)

埋設予定地に沿って、6ヶ所の試掘坑(各2m×2m)を設定した(TP1~6, 図版1-53a~53f)。調査地点は現代の攪乱が多く、近世以前の堆積を観察できたのはTP5・6である(図版1-53e・53f)。

TP5では地表下1.5mまでに第1~3層の近・現代土層が堆積する。灰青色土(第4層)はシルト質の堆積で、平安末~鎌倉初期の土師器細片を出土した。砂礫(第5層)は砂岩、花崗岩からなり、遺物は出土しなかった。TP6では厚さ1mの表土を掘削すると砂礫に



第55図 TP5 東壁の層位

達し、砂礫上面は標高約46mである。

以上の調査では遺構や良好な遺物包含層を検出できなかった。しかしTP5の灰青色土(第4層)から遺物が出土したことは、平安末期以後、鴨川、高野川の流路がこの地点より西に移り、北東の京大医学部遺跡や東の京大病院遺跡の遺構や遺物包含層がこの付近に及んでいる可能性を示す。

(宇野)

#### 〔注〕

- (1) 奈良国立文化財研究所技官中村友博氏に御教示をいただいた。
- (2) 足利健亮京都大学教養部助教の御教示による。
- (3) 『京都坊目誌』(確井15)には文久2年設置、明治3年廃止とある。